

1. 主はモーセに告げて仰せられた。
2. 「イスラエル人に告げて言え。  
男または女が主のものとして身を聖別するため特別な誓いをして、ナジル人の誓願を立てる場合、
3. ぶどう酒や強い酒を断たなければならない。  
ぶどう酒の酢や強い酒の酢を飲んでではない。  
ぶどう汁をいっさい飲んでではない。  
ぶどうの実の生のものも干したものも食べてはならない。
4. 彼のナジル人としての聖別の期間には、ぶどうの木から生じるものはすべて、種も皮も食べてはならない。
5. 彼がナジル人としての聖別の誓願を立てている間、頭にかみそりを当ててはならない。  
主のものとして身を聖別している期間が満ちるまで、  
彼は聖なるものであって、頭の髪の毛をのばしておかなければならない。
6. 主のものとして身を聖別している間は、死体に近づいてはならない。
7. 父、母、兄弟、姉妹が死んだ場合でも、彼らのため身を汚してはならない。  
その頭には神の聖別があるからである。
8. 彼は、ナジル人としての聖別の期間は、主に聖なるものである。
9. もしだれかが突然、彼のそばで死んで、その聖別された頭を汚した場合、彼は、その身をきよめる日に頭をそる。  
すなわち七日目にそらなければならない。
10. そして八日目に山鳩二羽か家鳩のひな二羽を会見の天幕の入口の祭司のところに持って来なければならない。
11. 祭司はその一羽を罪のためのいけにえとし、他の一羽を全焼のいけにえとしてささげ、  
死体によって招いた罪について彼のために贖いをし、彼はその日にその頭を聖なるものとし、
12. ナジル人としての聖別の期間をあらためて主のものとして聖別する。  
そして一歳の雄の子羊を携えて来て、罪過のためのいけにえとする。  
それ以前の日数は、彼の聖別が汚されたので無効になる。
13. これがナジル人についてのおしえである。  
ナジル人としての聖別の期間が満ちたときは、彼を会見の天幕の入口に連れて来なければならない。
14. 彼は主へのささげ物として、一歳の雄の子羊の傷のないもの一頭を全焼のいけにえとして、  
また一歳の雌の子羊の傷のないもの一頭を罪のためのいけにえとして、また傷のない雄羊一頭を和解のいけにえとして、
15. また種を入れないパン一かご、油を混ぜた小麦粉の輪型のパン、  
油を塗った種を入れないせんべい、これらの穀物のささげ物と注ぎのささげ物を、ささげなければならない。
16. 祭司はこれらのものを主の前にささげ、罪のためのいけにえと全焼のいけにえとをささげる。
17. 雄羊を和解のいけにえとして、  
一かごの種を入れないパンに添えて主にささげ、さらに祭司は穀物のささげ物と注ぎのささげ物をささげる。
18. ナジル人は会見の天幕の入口で、聖別した頭をそり、  
その聖別した頭の髪の毛を取って、和解のいけにえの下にある火にくべる。
19. 祭司は煮えた雄羊の肩と、かごの中の種を入れない輪型のパン一個と、  
種を入れないせんべい一個を取って、ナジル人がその聖別した髪の毛をそって後に、これらをその手の上に載せる。
20. 祭司はこれらを奉獻物として主に向かって揺り動かす。  
これは聖なるものであって、奉獻物の胸、奉納物のももとともに祭司のものとなる。

その後、このナジル人はぶどう酒を飲むことができる。

21. これがナジル人についてのおしえである。

ナジル人としての聖別に加えて、その人の及ぶ以上に主へのささげ物を誓う者は、

ナジル人としての聖別のおしえに加えて、その誓った誓いのことばどおりにしなければならない。」

22. ついで主はモーセに告げて仰せられた。

23. 「アロンとその子らに告げて言え。あなたがたはイスラエル人をこのように祝福して言いなさい。

24. 『主があなたを祝福し、あなたを守られますように。

25. 主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。

26. 主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。』

27. 彼らがわたしの名でイスラエル人のために祈るなら、わたしは彼らを祝福しよう。」

## 説教

民数記6章はナジル人についての教えです。「ナジル人 ryzln」は、「分離する、聖別する」を意味する「ナーザル rz:n」の語根から出た言葉で、「ささげられた者、聖別された者」という意味です。ナジル人は、古代イスラエルの、いわば修道士や修道女のようなもので、終生あるいは一定期間、神さまへの奉仕のために自分自身を神さまに献身した信徒でした。神さまのための奉仕する職業としては、祭司とレビ人たちがおもにそれを果たしました。彼らは神さまにささげられた献身者として、神さまの働きを担いましたが、これは世襲であり、当然レビ人以外の部族には許されません。これに対し、ナジル人にはどの部族の人でもなることができました。しかも、祭司レビ人とは対照的に、女性もナジル人になることができました(2)。その意味で、ナジル人はイスラエル人なら誰でもなることのできる信徒献身者のようなものです。

それでは、「主のものとして身を聖別する」ナジル人はどのような生活をしなければならないのでしょうか。神さまへの献身とは言葉だけのものではありません。献身者としての具体的な生活が伴わなければなりません。それで、ここでは三つのことが言われています。

一つは、ぶどう酒を絶つことです。ぶどう酒ばかりでなく、「強い酒」、「ぶどう酒の酢、強い酒の酢」、「ぶどう汁」、「ぶどうの実の生のものも干したもの」も、「種」「皮」に至るまで、とにかく「ぶどうの木から生じるもの」一切が完全に禁じられました(3-4)。ぶどう自体は決して悪いものではなく、良い物です。ぶどうはカナンに於ける繁栄、祝福、喜び、快樂の象徴でした。でも、一方では異教的な墮落した生活に陥る危険性もあります。アルコール依存症の症状に見られるように、酒はその人自身の精神と肉体と霊性とを破壊し、さらには家庭を破壊します。それで、神さまへの献身者であるナジル人は、墮落した生活に引き込まれる危険性のあるアルコール類を一切絶つことが命じられるのです。祭司は幕屋の奉仕の前にだけ飲酒を禁じられましたが(レ 10:9)、ナジル人は、それよりさらに厳しく、いついかなる時にも禁じられました。

ナジル人の生活で二つ目に命令されているのは、頭髪のことです。「頭にかみそりを当て」ることな

く、のび放題に放置することが命じられます(5)。(髪を力といのちの源と考える異教の風習である)髪  
の毛を神にささげる毛髪供養を拒否し、髪型やファッションなんぞに気を取られることなく、ひたすら  
神さまに仕える生き様の表現と考えられます。ナジル人の長い髪である「聖別された頭」(9)と訳され  
る「ネゼル rz<nE」は、大祭司のかぶりもの、そそぎの油とも訳されます。大祭司は、特有のかぶり  
物で自らが神さまのものであることを表現しましたが、ナジル人は、ボウボウと伸ばし放題の髪の毛で  
同じ聖さを表現しました。そしてナジル人の聖さは、通常の祭司以上の、大祭司の聖さと献身を要しま  
した。

このことは、三つ目のナジル人の生活ぶりにさらに顕著にあらわれます。ナジル人は死体に触れるこ  
とを禁じられました。たとえ両親でも兄弟姉妹でも、死体に触れてはなりません。死体の所に行くこと  
も許されませんでした(6-7)。なぜならナジル人は神さまのものであるからです。「主のものとして身を  
聖別して」います(6)。「その頭には神の聖別があ」ります(7)。それゆえ、死者の前にかがみ込んで  
ならず、死者から離れていなければなりません。異教徒は死者の葬儀を重視して先祖崇拜や死者崇拜な  
どを懇ろに行いますが、ナジル人は神のいのちから遠く離れた最後の敵である死にみだりに近づいては  
なりません。死から遠く遠ざかっていなければなりません。いのちに満ちた神さまのものとして、神さ  
まにひたすら仕えなければなりません。通常の祭司は自分の近親者の葬儀は行えましたが、ナジル人と  
大祭司はそれも禁じられました(7,比` 21:2-3,11)。主に身をささげた者は、もっぱら主に仕えなければ  
なりません。いのちに満ちた神の栄光をあらわす者は、もっぱら神さまと交わることを通して、  
神のいのちを人々にもたらさなければなりません。

以上の生活を通して、ナジル人は霊的にイスラエルの先頭を行き、ナジル人であったサムエルのように、  
続くイスラエルの人々に神さまの栄光をあらわし続けるのです。

やむなくナジル人が死体に触れてしまう場合には、それまでのナジル人としての誓願は無に帰しま  
す。また一からやり直さなければなりません。七日目に頭を剃り、八日目に、汚れた者がささげる山鳩  
か家鳩の雛二羽をささげます(10,比` 12:8, 14:22, 30, 15:14, 29)。一羽は罪のためのいけにえとして、も  
う一羽は献身を意味する全焼のいけにえとしてささげます(11)。そうして、また初めから献身の生活が  
始まるのです。誓願が満了したら、大祭司任命の際のいけにえと同じ程度のものをささげてから、通常  
の生活に戻りました(13-20,比` 8章)。

本来はナジル人ばかりでなく、イスラエル全体が神さまの「祭司の王国、聖なる国民」です(出ヱ  
ト19:6)。その最高の代表こそ大祭司でしたが、同時に、男も女も誰でもそうなることのできる献身者、  
あるいは神の栄光をあらわす奉仕者として、ナジル人がいました。それは単にナジル人だけの特権で話  
が終わるのではなく、神さまがそのような信徒献身者をイスラエルにわざわざ置かれたということが重  
要なのです。

神さまは、人々の上に神の栄光をあらわす最高の奉仕者として大祭司職を置き、さらには大祭司並み  
の献身者、あるいは神さまに仕える奉仕者として、ナジル人を定められました。そして神さまは、彼ら  
に同じ献身を要求なさいます。ということは、神さまへの献身者、あるいは神さまの働きをする奉仕者

というものは、要するに、大祭司のように生活し、ナジル人のように生活しなければならないということです。なぜなら、イスラエル全体が例外なく「祭司の王国、聖なる国民」であるからです。大祭司とナジル人が先を行き、イスラエル全体に神の栄光を力強くあらわしながら、その光に照らされつつ、全イスラエルは彼らを手本として神の栄光をあらわす生活をするよう努力します。

最後に大祭司の祝祷がなされます(22-23)。まず、主がイスラエルをあらゆる悪と災いから「守って」、「祝福」してくださるようにと祈ります(24)。次に、主が慈愛に満ちた「御顔を」闇の中に苦しむ「あなたの上に照らし」てくださるよう祈ります(25)。そして最後に、「主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。」(26)と祈るよう命じられます。つまり、神さまが特別に関心と注意を寄せて「御顔をあなたに向け」、イスラエル最高の理想とされた「平和~Al)v'(シャロム)」を与えてくださるよう祈るのです(26)。「平和」とは霊的にも精神的にも物質的にもあらゆる面で完全に充足して満ち足りた状態です。そしてイスラエルの一切の制度は「平和」の実現のためでした。律法も、幕屋も、そこで奉仕する奉仕者(大祭司、祭司、レビ人)も、いわばイスラエルに「平安」を与えるために存在していました。彼らは、神さまがどのようにイスラエルに憐れみ深くあらわれるかを知らせる神の御顔の光です。そして何が神さまのみこころであることを知らせる御顔の光でした。幕屋もいけにえも、神さまの前には罪深く滅ぼされて然るべきイスラエルの罪を神さまが赦してくださるということをあらわす、慈愛に満ちた神さまの御顔の光です。

「主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。」この祝祷が全イスラエルになされましたが、神さまは大祭司アロンにそれをおさせになりました。「御顔」の光を誰よりも仰ぎ見て、それを誰よりもあらわしている大祭司アロンに、神さまは全イスラエルに向かって祝祷をさせるようになされたのです。それは、全イスラエルを通して、全世界の人々が「主の御顔」を仰ぎ見るためです。彼らを全世界の祝福の基として、神の栄光を全世界にあらわすためです。憐れみに満ちた神の御顔の光を全世界にあらわすためです。その働きを神さまから委ねられたのが、大祭司でした。そして、大祭司の献身と奉仕者としての生き様を誰でも体験して担うことができるようにと、神さまはナジル人の制度を定められました。勿論、ナジル人は大祭司とは異なりますが、献身者としての地位と聖さは大祭司に匹敵しました。それはイスラエル最高の献身と聖い生き様です。そしてそれには誰でもなることができました。男でも女でも、やる気があれば、イスラエルの民全員がそうなることができました。アルコールを飲まず、なりふり構わずひたすら主のために奉仕し、聖なる神さまの働きを汚して邪魔する汚れたものから遠ざかり、専ら主のために奉仕します。こうして神の御顔の光を暗黒の世に力強くあらわす生涯を生きる者になりたいと思います。